

京における路地空間の把握

高岡光太朗・吉川 真・田中一成

Analysis of Alley Space in Kyoto

Kotaro TAKAOKA, Shin YOSHIKAWA and Kazunari TANAKA

Abstract: The purpose of this research is to understand the present spatial conditions and characteristics of alleys in Kyoto. The central urban area where consists of four wards, Kamigyo, Nakagyo, Shimogyo, and Higashiyama Ward, is selected as a case study area. The locations of alleys are extracted from the housing map and the data of alley investigation conducted by the city office. The distribution of alleys is analysed on GIS, and the crowded areas are found. Then, the spatial elements of alley are extracted on the typical alley there.

Keywords: 空間情報技術 (geo-information technology), 京都 (kyoto), 路地空間 (alley space)

1. はじめに

日本国内における路地は、都市それぞれの成り立ちと変容を示す痕跡である。それは都市の歴史と文化の象徴であり、都市としてのアンデンティティを示すものであり、とくに京都市といった古代から多様な変遷をたどった歴史都市においては、その歴史の蓄積を如実に物語るものとなっている。また、路地が「細い道・通路空間」であることは、路地の多くの人の生活に非常に近いものとして培われてきた経緯を示すものであり、歴史都市の路地は各時代の人々の営みを反映しながら現在にいたっている（京都市・大津市・宇治市三都市協議会、2007）。

京都の市街地では、碁盤目状の大路小路が形成されており、街区の間を通り抜けできる狭い街路が数多くあり、これを路地と書いて「ろー

高岡：〒535-8585 大阪市旭区大宮 5-16-1
大阪工業大学大学院 工学研究科都市デザイン工学専攻
TEL: 06-6954-4109 (内線 3136)
e-mail: takaoka@civil.oit.ac.jp

じ」と呼んでいる。近年京都では、定番コースの社寺観光だけでなく、伝統的な京町家を散策する「まちなか観光」が脚光を浴びている。また、最近では、この「路地」や「路地裏」がブームとなっている。路地ができた形成過程は平安京の町割が序々に変化して形成されてきており、平安時代末期頃に人びとは暮らしの利便性やコミュニティ形成のために作られてきた（図-1）。現在、ほとんどの路地が明治期から形成されたものであり、石畳などの特徴をもつ京の路地空間は、今も多くの人から注目されてきている。そこで本研究では、石畳などの要素によって路地らしさが感じられる特徴を多くもつ京の路地空間に着目することとした。

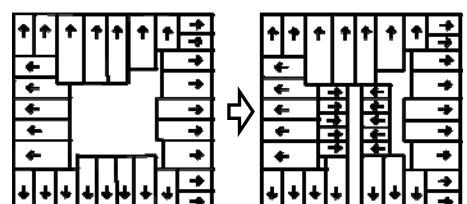


図-1 路地の形成過程 (平安時代末期)

2. 研究の目的と方法

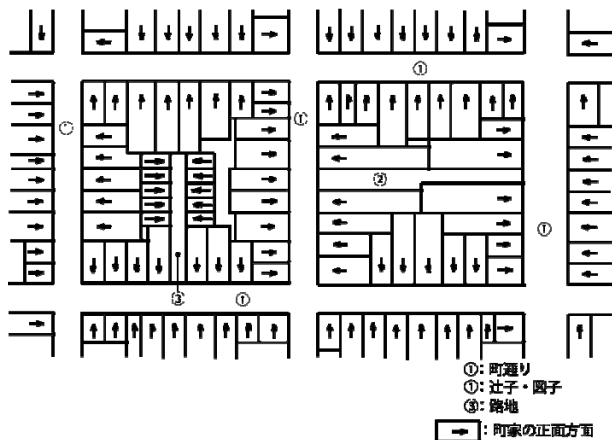
近年路地では、歴史・文化を色濃く残す存在として見い出されるとともに、現状の問題点として、路地の防災性の欠如などが懸念されている。おもに幅員 4m 未満の路地は消防車などが通れないため、防災面・安全面の機能をもたせるために道を広げるということが最も効果的であると考えられる。しかし、それでは路地らしさを失われてしまう可能性があるため、路地らしさを維持しながら問題点を改善することが重要である。そこで、京都の路地空間にある路地らしさを量化することを本研究の目的とする。

まず、京都の中心市街地となっている上京区、中京区、下京区、東山区の 4 区を対象地とする。また、この 4 区では（財）京都市景観・まちづくりセンターが、現存する京町家について調査を行っている（京都市都市計画局, 1999）。このため、路地は建物と建物の間を縫うように形成するが多く、典型的な路地を抽出できると考えた。そこで、路地の定義を調べ、それにもとづく路地空間を地理情報システム（GIS：Geographic Information System）上に基盤地図情報と住宅地図を用いて抽出する。抽出した路地を対象に現地調査より路地空間の要素と構成を把握している。くわえて、路地空間をモデリングしデザイン・シミュレーションすることによって把握した路地らしさを表現している。

3. 路地（ろーじ）の定義

京都の路地は、L 字型、T 字型、卍型、鉤型など、さまざまな街路形状をもっている。またそれらの構造によって独特の呼び方があり、町通りの間をつなぐ突き抜けの路地を「団子・辻子（づし）」、行き止まりの袋路地は路地（ろーじ）などと呼ばれている（図-2）。しかし、それらは慣習的な呼び名であり、路地には明確な定義が存在しないため、本研究では路地の定義を「①幅員が 4m 未満であること、②通りに対して路地が直角であること、③通り抜けできる（団子）、できない（袋路地）は関係なく、全てが対象。」

とした。



4. 対象地の選定と結果

前章の定義にもとづいた路地空間がどこあるかを把握するために、GIS を用いる。しかし、国土地理院より提供される基盤地図情報では前章の定義にある 4m 未満の街路は表記されていないため、4m 未満の街路が表記されている web 上の地図サービスにも用いられている民間の住宅地図を用いることとした（図 3）。調査対象地とする上京区、中京区、下京区、東山区の全てを網羅して詳細な調査を行うことは現実的ではない。このため、上記 4 区それぞれで、町内の路地数の多い地域に着目した。路地数が多い地域は、さまざまな路地空間が存在しており、多くのサンプルを得ることができると考えたためである。これにより本研究の目的である路地空間の路地らしさを把握するのに役立つと考えた。詳細に調査する調査地を選定するにあたり、路地数以外に「路地の全長」も重要であると考えた。理由として、長ければさまざまな特徴が多く含まれると考えられるためである。ここで基盤地図情報に記載されておらず、住宅地図に記載されている道を路地と仮定し、GIS 上に定位して路地の分布状況を調べた。中京区においては、分布状況から調査する町を表 1 の下部に記されている 14 の町に選定した。選定後、各町の路地空間の特徴を把握するために、現地調査ではビデオカメラを用いて路地の細部まで撮影し

た。その結果、「自転車」「町家」「石畳」「照明」「町家路地（町家の下を通り抜ける路地）」など10の特徴を抽出でき、このなかで「石畳」「照明」「町家」「町家路地」を路地らしさの要素と考えた。理由として、路地について記載されている「路地からのまちづくり」では、京都の路地の路地らしさとして石畳や灯籠といった特徴を取りあげているためである。この4つの要素をもつ町がどこであるか、14の町の中から調べた結果、中京区の「下樵木町」が比較的高い割合を占める結果となった（図-4）。



図-3 基盤地図情報と住宅地図の街路表記

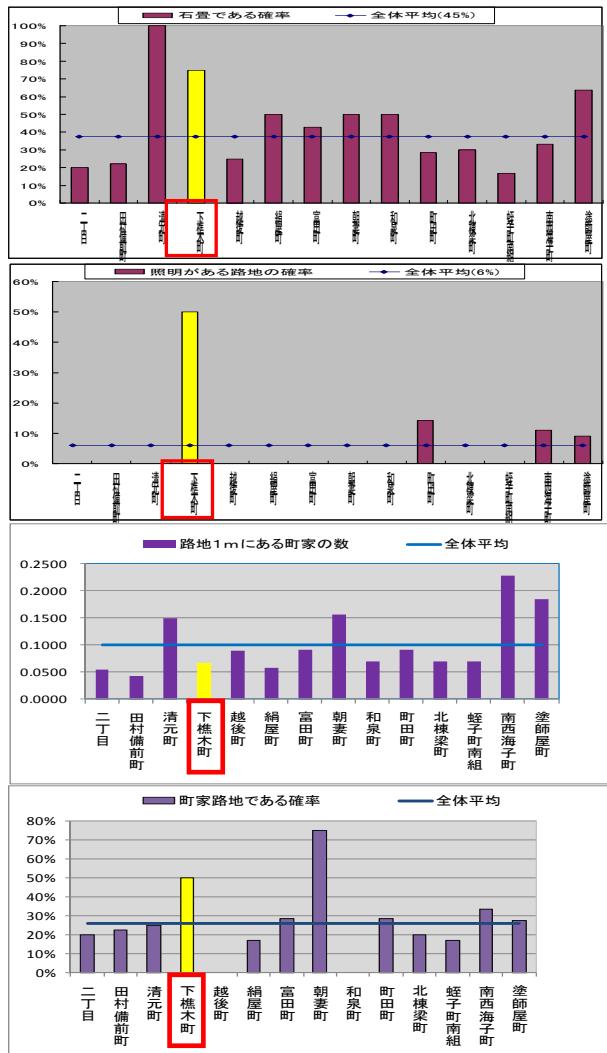


図-4 4つの要素グラフ

5. モデリングによる魅力の把握

前章で明らかとなった下樵木町の路地を参考にし、路地らしさと考えた二つの要素の有無によって、路地空間がどのように変化するか、路地空間のシミュレーションを行った。これにより、要素を追加し照明を灯すことで主観的ではあるが、路地の魅力が変化したと感じる結果となった（図-5、図-6）



図-5 シミュレーション1

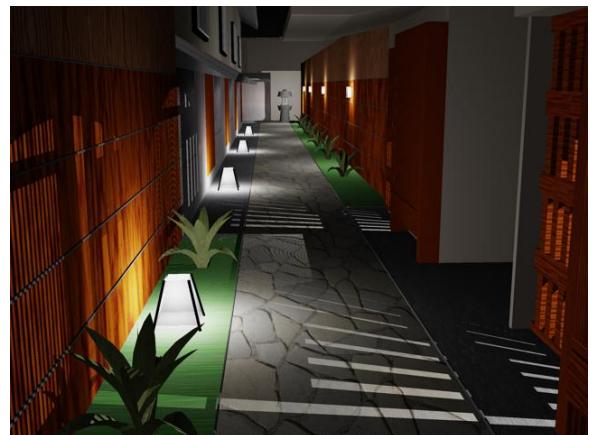


図-6 シミュレーション2

6. 課題

GIS上で京都の路地の分布状況を把握することで、路地数や特徴の抽出することにより、多くの路地が集積する町を把握することができた。しかし、全ての路地を網羅できているわけではない。全ての路地を網羅するためには現地調査を行うか、また現地調査に近いデータを取れるものが必要となってくる。また、抽出した路地中から、路地らしさを創造する二つの要素を把

握し、モデリングによる要素を試みたが、現段階では主観の域で留まっており。また、要素抽出方法に関しても確固たる信頼性が望めるもではなかった。

7. データ基盤の再構築

7.1 提供データ

研究の展開に対応して、京都市から平成18年度に同対象地域で行われた「京都を中心とした歴史都市の総合魅力向上調査」の調査データを提供いただいた（京都市・大津市・宇治市三都市協議会、2007）。提供データには、紙ベースの白地図上にIDが記された路地の位置情報に、その各路地の属性データがExcel形式でまとめられており。データ基盤としての信頼性のあるものができると考えた。これらより、データ基盤の構築では基盤地図情報を元にして路地を定位している。定位した路地には属性データを付加することで、どこにどんな属性を持っている路地

シートA																				
1始端 7部 5 4 0 m	非始端 特部 例1 7 5 m	調査可否	代表部	始端部1	最大	最小	代表部	始端部1	最大	最小	延長	舗装状況	路地番号 21	防災器具	消火栓	消火器	水バケツ	非常ベル	防災施設	小角防風

シートB																						
総軒数	空家数	非住宅数	階数	構造	用途	サモビル	業務	工芸	店舗	その他	老朽度	有町家の 有無	二階建て	三階建て	平屋	仕舞屋	塔付	看板建築	その他	有園無由 の有無	地蔵祠	石碑

図-7 属性データの一例

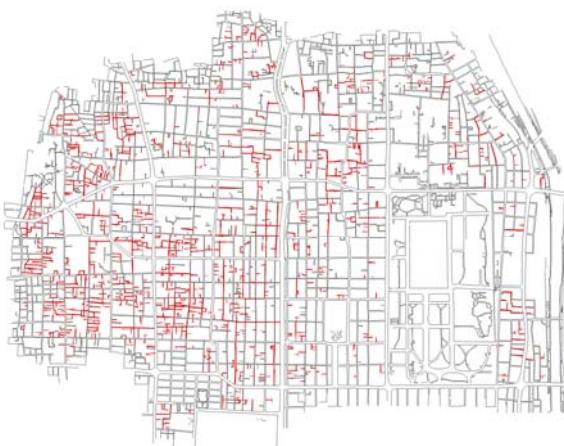


図-8 路地の定位（上京区）

があるのかを表示可能となった（図-7、図-8）。

8. おわりに

京都市が路地調査でのケーススタディ地区を選定する際に、路地の魅力ある景観指標として六つの要素「美観地区（認定、界わい景観整備地区、重要界わい景観整備地区）」、「袋路地 or 抜け路地」、「石畳の有無」、「伝統産業工房の有無」、「町家の有無」、「歴史性の有無」を取り上げており。これを参考して元学区単位で、どこに多くの要素を含んだ路地が集積しているのかを抽出している（表-1）。上記のように、属性として有無の情報しかないものがあり、それについて定量化していくことで、より精緻なデータ基盤の構築を行っていくことにしている。

参考文献

京都市・大津市・宇治市三都市協議会（2007）：

「京都を中心とした歴史都市の総合的魅力向上調査に係る歴史都市の美しい細街路の維持・保全のための調査研究報告書」、国土交通省 住宅局。

京都市 都市計画局（1999）：「京町家まちづくり調査 集計結果」、京都市 都市計画局。

表-1 元学区別路地要素の集計

No.	元学区	路地本数	1Point	2Point	3Point	4Point	5Point	6Point	Point合計
1	成逸	38	20	13	4	1	0	0	62
2	乾隆	21	5	9	6	1	0	0	45
3	西陣	19	0	5	2	9	2	1	68
4	室町	94	43	31	17	3	0	0	168
5	翔鶯	100	17	39	34	9	1	0	238
6	嘉楽	11	3	4	4	0	0	0	23
7	桃薫	24	2	9	7	6	0	0	65
8	小川	31	7	10	11	3	0	0	72
9	仁和	173	64	53	50	6	0	0	344
10	正親	63	27	24	8	4	0	0	115
11	聚楽	29	5	13	8	3	0	0	67
12	中立	15	7	7	1	0	0	0	24
13	京極	29	17	11	1	0	0	0	42
14	出水	100	39	38	20	3	0	0	187
15	待賢	36	10	17	9	0	0	0	71
16	滋野	34	9	14	9	2	0	0	72
17	春日	24	6	6	10	2	0	0	56